

第一分散会

座長 灘上智生

副座長 坂輪宣政

記録 菊岡妙光

参加者 十一名

一、運営について

三原正資所長の基調報告、枝木美香氏と西永亜紀子氏の基調講演、中井本蓉氏の問題提起をうけて、何点かポイントを絞り参加者に意見をいただくこととした。

二、分散会討議

【SDGsに関連して】

① SDGsへの関心などについて

- ・SDGsについて耳にする機会が増え、環境問題程度の事かと思っていたが、十七も目標があるとは思ってもみなかった。大きく難しい問題で、個人でどうすることも出来ない。
- ・ジェンダー問題が中部教区の教研会議の議題で上がり、今まで知らなかったが調べるようになった。やはり難しい問題で何が正解なのかわからない。皆様の意見を聴き参考にし、考えていきたい。
- ・仏教的なことをもう一度学んだ上で、仏教思想をSDGsに合わせるのではなく、仏教思想の中にSDGs的な

要素が入っているということアピールしていくことがよいのではないか。

・SDGsの内容は色々あるのでどこに焦点を置けばよいのか。個人、宗門、仏教界、一体どのあたりから変えていけばよいのだろうか。

② 実際に持続可能な活動をしているか、また、身近にそのような方がいるかどうか

・寺子屋、フードドライブ、おてらおやつクラブ、フードパントリーなど、SDGsが謳われる前から寺院は元々問題意識をもって取り組んでいた。

・身近にできる取り組みとして、寺院に上がった御供養を近所や子どもがいる家庭、檀家、商売をしている人に来客用お茶菓子として使っていたために、おすそ分けとして配っている。

・御供養のお菓子等をやめ、その分、あんのん基金に五百円を入れてもらうことで、フードロスがなくなるのではないか。

【仏教におけるジェンダー問題について】

① 身近な問題や気づいていない問題、納得いかない問題があるかどうか

・男性と女性はすべてが同じであるとは考えにくい。寺庭婦人、坊守、住職、それぞれの役割で互いに支え合うことで寺院の活動が円滑になると考えている。

・知り合いの女性教師から聞いた話。信行道場で質問された「出家の動機」について、「尼僧の出家の動機は不幸なことを経験していないとダメなのですか。日蓮大聖人や法華経、お寺が好きだからではダメなのですか？」と言っていた。

・ジェンダー問題は世代間で視点の違いがあるように思われる。どの世代に焦点を合わせるかで意見や考え方が異

なってくるのではないか。

・宗定法要式が昭和版から平成版に変わった時に、法事における男女の座配、数珠のかけ方など、男女を区別する記載は削除、変更された。

・寺院の中で住職と寺庭婦人の役割分担がすでに出来ている。寺庭婦人は僧侶と異なった視点から物事を見て、アドバイスしてくれるありがたい存在である。

・LGBTQのために、性別によらない位号が必要だと思う。

【将来の教師像について】

① 今回気づいた点や役立てたい点、どのような教師になりたいか

・日蓮宗は男性教師が圧倒的に多く、女性教師は全体の1割程度である。必然的に会議等での女性の在籍率は低くなり、決定事項は男性の意見で進んでいく。女性教師の人数を増やしたい。

・SDGsは大きな問題なので、まずは身近なことから取り組んでいこうと思う。

・総代に女性がいることで今までと違う視点の意見が出てくる。

・SDGsについて、僧侶の立場としての意見と、個人としての意見は違ってくるが、色々な立場の人の意見を受け入れ、認め、取り入れていくことにより自分の答えを見つけていきたい。僧侶として人を批判せず優しく生きていきたい。

・SDGsに謳われていることは元々仏教にあったものと共通する。人は耳触りのいいものに乗ってしまうが寺院として、僧侶として根本的なところも押さえておくことが大切。世間の流れに振り回されず、SDGsは方便としての最新ツールとして捉え、法華経や大聖人の教学などを伝え、弘めていきたい。

・LGBTQについて。知り合いに何人かいるが、差別意識をもったことがない。このようにあるべきだ、このようにありたいと、一人ひとりの考え方は違うが、その間の緩衝材のような役目の存在でありたい。色々な性があるから、話を聞き、それぞれの意向を汲み取っていくことが大切。

・女性らしさ、男性らしさの価値観はこのまま続いていくだろう。お互いを尊重し女性も意見を言える社会を育てていくことが必要。

二、まとめ

SDGsは大きな問題で参加者にとって身近なものではなかったようだが、貴重な意見が出てきた。世界的な問題として取り上げられているので、その流れに左右されやすい傾向にあるが、SDGsに仏教や法華経、日蓮聖人の教えをあわせていくのではなく、もともと仏教や法華経、日蓮聖人の教えの中にSDGs的な考え方が存在すると思う。日蓮宗教師はSDGsを方便として捉え、日蓮宗の教えを伝え、弘めていくことが必要であると感じた。そして、社会とのつながりを持ちながら持続可能な活動を念頭において、視野を広げて考えていかなければならないと思う。

第二分散会

座長 石原顕正

副座長 原一彰

記録 内藤善之

参加者 十一名

一、運営について

午前・午後の講演と問題提起を受けSDGsについて仏教者はどのように関わるべきか、仏教界におけるジェンダー問題をどのように考えるのか、総じては両者の問題を含めて、本宗教師として取り組むべき事は何か、という点について討議した。

二、分散会討議

分散会討議では中井本蓉師の問題提起について座長の進行のもと具体的な事例や新たな資料を提示し再提起を計り、SDGsに内包する形でジェンダー問題を討議する運びとなった。根本にある問題意識は、本宗教師として持続可能な社会と平等をどう実現していくか、宗門運動の理想的な実現ということであり、活発に意見交換が行われた。

左に、具体的事例の資料や討議を内容別に項目を立て主たる意見を列記する。

【新たな提起 無意識のバイアスについて】

誰もが潜在的に持っているバイアス（偏見）。二〇〇〇年頃から着目されてきた新しい概念。育つ環境や集団や属性の中で、知らず知らずのうちに脳に刻み込まれ既成概念、固定概念となるバイアスの対象は、男女、人種、貧富などさまざまであるが、自覚できないため自制することが難しい。無意識のバイアスは、判断する過程において便利にショートカットの役割を果たしている。

【ジェンダー問題の具体的な事例 資料として台湾における出家制度について】

台湾は出家による社会進出——戦後台湾における女性僧侶の生き方が明確になってきた。日本統治やそれ以前は伝統的「古い」家庭価値観があった。

女性が出家により身分が保障され社会参加が出来るようになる。台湾における授戒者数の男女比は比丘二十五%、比丘尼七十五%である。女性出家者はより高い社会的地位とより大きな経済的権利を有している。台湾仏教は、生活の意義と事業の機会を提供し、台湾社会は比丘尼という宗教的身分を尊重するため、女性出家者が男尊女卑の制約を超越し、一般女性より強い発言権と指導力を手にすることを可能としている。

伝統的な僧俗の区別が社会の女性に対する蔑視を軽減し、彼女らの高学歴は宗門内での宗教的地位を補強する。台湾女性の信仰生活の在り方は、僧侶として生きる事と（僧侶の）補佐として功德を積む信徒の組織とに専門化する。どちらも台湾女性の信仰生活を家庭から社会に向かわせ、その活躍を私的領域から公的領域に拡大させている。

【SODSUDSUN】

・持続可能 (sustainable) ということがひとつキーワードになる。現在の我々の生き方、様々な問題を解決克服しな

- ・ かつたならば、将来の人類の生活は sustainable ではないということに危機感を持たなければならない。
- ・ 毎回、研究会議などで議論が深まらない原因として、我々僧侶は宗教者、寺院、住職としての立ち位置が譲れないところがあるからである。
- ・ 「SDGsとは、何をするかより、現在自分が取り組むことで、どのカテゴリーに当てはまるのかを考えてみる」とあり、まず家庭人として社会人としての取り組みや寺院・宗教者として社会との接点を考えてみないと議論は進まないのではないか。
- ・ 百年後を考えた時に地球がどのように変化しているのかを考えると少し恐ろしいので、危機感を持って、一人一人が持続可能な取り組みを考えていく事が必要。壇信徒にも共有していく事が重要ではないだろうか。
- ・ SDGs という一つの価値観を押し付けられるのではないかとという危惧がある。宗門として教師として、SDGs と関わっていく時に宗祖の教えをねじ曲げていないかを常に検証していく必要があるのではないか。世間でSDGs を取り上げているからといって宗門もその運動に安易に乗るべきではない。
- ・ SDGs のような社会全体の問題をみんなで解決していこうという視点は有意義だと感じた。
- ・ SDGs に取り上げられる諸問題の解決を考えることは人間として当然のことと思う。
- ・ SDGs を自分の身近な活動に当てはめて考えると、私は現在ボイスカウトの指導者として活動に関わっており、活動の一つとして鳥取砂丘の清掃活動に参加している。また航空自衛隊に五年間勤務していたので現在も予備自衛官としても訓練、活動をしている。このような活動を通してSDGsを考えていきたい。
- ・ 環境問題については今まで二酸化炭素の蓄積による地球温暖化について否定的な見方をする人が多かった。しかし現在、驚くべき自然災害に襲われて温暖化を認めざるを得ない。このような地球規模での問題を個人に引き合わせることが大変難しいことではあるが、できる範囲のことに目を向けていくという点で非常に良いと思う。

- ・仏法は体で世法は影であるべきところが、世法が体で仏法が影という風潮になりつつある。そういうところのバランスを考えねばならない。
- ・SDGsという観点からそれぞれについて、世界中で考えられているということは大変素晴らしいことであり、続けていくべきと考えている。賛意を示す人の中でも様々な考え方があって思うので、その人の本当の真意がどこにあるかという点を考えながら進めていかないと変な方向に行くのではないか。
- ・国連は常任理事国の顔ぶれから見えていくとキリスト教文化の人々が力を持って進んでいる団体だと思う。国連が全世界の人に「これがグローバルスタンダード」といって価値観を決めていくことは非常に危険ではないのか。より発言権がある人々の意見が通ってしまうことは恐ろしいことである。キリスト教圏の価値観というものではなく、やはり仏教者としての立場で考え、SDGsが進んでいかないといけない。

【宗門運動とSDGs】

- ・宗門運動の中で行われている常不軽菩薩の但行礼拝の教え、常に軽んじることなく色々な人に尊敬の目を向けて礼拝をして敬うという教えの実践を広めることが重要である。男女に優劣があるわけではなくて、全ての人を尊敬して接していくことによって、より良い社会になっていくのではないかと思う。法華経の教えを通じてこの世の中を少しずつ変えていくことができれば良いのではないか。
- ・単発としての宗門の運動目標ではなく、長く続く宗門運動があれば良いと思う。一般教師から見ると本当に宗門運動が盛り上がりつつあるのか、疑問を持たざるをえない。それも含めて若い世代の方々が新しい考え方を入れているだけだかと思う。宗門運動を継続し、如何に具体化・具現化していくか、そのことがSDGsに繋がることになると思う。

【ジェンダー問題について】

・基調報告で触れられていた『わたしは贗作』の話で感じたことは、男性も女性も互いに頑張って生きてきたということ。決して女性が男性になることを望んでいるのではなく、性別にかかわらず個人が一人の人格として尊重されるべきであり、そして自分の使命を達成していく為に努力することが求められていると感じた。

・ジェンダーと寺院ないし仏教界を絡めた議論の際に、外せない問題として三宝給仕があると思う。信仰が高まる故に自らの行として、仏祖三宝に給仕をしていくというのがその精神であろうが、傍から見ると自分の権利をも蔑ろにして寺院に尽くしているように見えるかもしれない。主体的に見るとそれは信仰心の表れである。確固たる信仰心が成熟しないままに行為のみを強いてしまっているならば、それは苦しみを与えているだけなのではないか。三宝給仕は信仰心故の行為であると思うので、その行為を仕事と見立てて権利や対価というものを求めてしまうとそれは給仕とはいえないのではないか。

寺院の中のジェンダー問題というのは（寺庭婦人としての）女性の信仰の確立や周囲の理解と助言などが必要で、主体的に給仕していくという気持ちを一緒に作っていかなければならない。

・具体的な事例として挙げられた、台湾仏教における女性出家者の事例は果たして出家といえるのか。そもそも社会から出ていくことが本来の出家であるのに、社会である程度の権利を得るための出家というのは本来の意義として間違っていないか。

・ジェンダー平等に対して日本と韓国が遅れていることを考えた時に共通することは言葉に敬語があることが挙げられる。特に儒教の考え方というのが非常に浸透していて目上の人は敬わないといけないということからはじまり、どこかで男性が優れていて女性が劣っているというような考え方が浸透していったのではないのか。

・引き継がれた伝統というものがあるが、それを改革するのは大変困難である。年功序列、上の人に意見を言いづら

いような雰囲気がある上、現場では常に女性は人数が少ない状況にあるが、その中で女性が活躍して更に寺院が良くなる方策を考えていかなければならない。

・僧侶のジェンダー平等を考える上で必要なことは教育の平等である。必要な教育を受けた上で、寺院で一年以上修行する等、終わった後で改めて平等について考えた方がより浸透するのではないかと思う。

・西永重紀子氏の講演で印象に残ったことは、本人は自身の経験からその制度や慣習に対して否定的な意見を持っているが、さりとして既存の旧体制的などころで頑張っている人のことを否定してはいないという、そのバランス感覚は僧侶として大事であると感じた。

・基調報告の中で女性教師によるお茶汲みの話があったが、二、三十年ぐらい昔は女性がいるとお茶汲みは当然という雰囲気であった。しかし、この十年ぐらいは若い男性教師が動いてお茶を出してくれている。若い人の世代では男女差というのはあまりなくなってきたように思う。

・問題提起の中で「主婦がいないと回らない構造」というのがあったが、全くその通りだと思う。家の中でも雑用とというのはだいたい女性がやるようになってしまふ。それはやはり躰や教育の問題である。

・寺庭婦人でも女性教師でも自分のやりたいことをやる範囲でやったらいいと思う。差別と区別は違う。何か得意な事等、活躍できる道を自分で拓いていくことが必要なのではないか。

・寺院の中でのジェンダーを考える上で教師と寺庭婦人の何が違うか、それは資格があつて経が読めるという点のみである。男女同じく出来ることも、なぜか女性に負担がかかっていると感じる。

・多様性の許容というのがジェンダー平等の本質だと思う。本人がどうしたいのかとか、本人の能力をきちんと加味した上で、寺族であつたら寺院の中でどういう働きが出来るのか、どういう意見を取り入れることができるのかという環境づくりが必要であることが平等を考えることではないのか。

・今日ジェンダー問題が活発に論じられているのは、日本社会で人口が減少し女性の活躍がなければ日本社会が成り立たないからであると思う。寺院についても将来的に経営が厳しくなり寺族を養えない、結婚もできないということとも予想される。よって女性の活躍、社会で働く女性が必要なのは寺院の持続可能性と関係があると思う。

・寺院を守る人の存在は大切だと思う。しかしそれを寺庭婦人に押しつけるのではなくて、外で働きたい人には相應しい場を与えてあげれば良いということ。重要なのは選択権があることではないか。

二、まとめ

第二分散会では従来とは異なる環境で九十分という時間制限の中、主としてSDGsに内包する形でジェンダー問題の討議が行われた。大きな問題で、分野が広い事もあり、問題を討議し、理解を深めて行く上で具体的な事例や問題を補完する新たな提起がおこなわれた。その結果、積極的に活発な意見交換がなされた。

今回の問題提起は内容が多岐にわたるため理解度や認識が各個人によって大きく異なり、またオンライン会議の性質上、双方、多方向的に議論を深めるということは難しく各々の主張や考えに対して更なる方向を示しにくいということが窺えた。

ある程度SDGsの基礎的理解や仏教との関係性の議論がおこなった上で、再度このような議論が必要ではないかと感じた。

第三分散会

座長 都 泰雄

記録 水谷進良・岡田文弘

参加者 十名

一、運営について

事前の注意点としては、講演のテーマが日頃の馴染みが少ないSDGsであるため、果たしてまとまりある討議ができるか、またジェンダー問題というデリケートな課題を扱うため、感情論にならないか、という二点に注意し運営を心がけた。しかし全体的には講演内容に触発されたことよって、SDGsや宗門の女性教師のありかたなどについて再考する契機となり、女性教師・男性教師それぞれの立場から、開催趣旨に沿った形で活発な議論が展開された。

二、分散会討議

【講演を聞いての感想】

・SDGsに関してはテレビ等で耳にはしていたが、どのようなものかを実感する場がなかった。スーパーからレジ袋が消えたのもこの運動の結果くらいの認識しかなかったが、持続可能な循環社会が大きな目標で、その実現のために様々な目標があるということ学ぶことができた。

・日蓮宗教師であるため法華経の教義を尺度としてSDGsを考えなければならぬ。浄土真宗の立場から親和性があるかと主張して批判されたという話もあったが、教義という観点から見ると、SDGsと日蓮宗との親和性はあ

るのが気になるところであり、僧侶としてこの問題にどう関わっていくのかを学ばなければならない。

・私が所属する管区には女性教師が一人もいないため、関わる機会が少ない。よって宗門内におけるジェンダーの問題点に気づく機会がなかった。今回、女性教師の声や抱える問題点を聞くことができて良かった。

・住職としての法務と、寺院を裏から支えるという役割上の分担をジェンダーの問題に転嫁して論じられているような印象を受けた。講演を聴く限り、男性がお茶汲みなどの裏方の仕事を積極的にしてほしいということなのかよく分からない。ジェンダー問題と役割分担が混在していないか。

男女の機会均等は目指さなければならぬが、その他は主観的なフェミニズムと絡み合っているため、問題点を浮き彫りにしづらかった。

【ジェンダー問題について】

・中央（東京近郊）の感覚で発信されることが多く、田舎の寺院における現実と大きな温度差を感じる。女性自身が仏道を志しているにもかかわらず、その機会を拒むことや活動しづらい状態であるならば是正しなければならない。しかし、性差に基づく差別ではなく女性教師が少ないことで生じる不便については男女比の問題であるので、致し方ないことなのではないか。

・三十年前に出家し女性教師となり、初めて研修会議に参加した際、高齢の女性教師が足を引きずりながら若い男性教師にお茶出しをしていた。若い男性教師は手伝うこともせず、また感謝も述べず平然とお茶を飲んでいたことに最も衝撃を受けた。

「昔はそれが当たり前の時代だった」という人もいるが、OLとして働いていた経験からしても、一般社会では有り得なかった。大変な男尊女卑の場に来てしまったなと思うこともあったが、時代を経て当時の感覚をもった男性

教師は去っている。現代の若い男性教師は男尊女卑の感覚はなく、平等に対応する姿が多く見受けられる。

・第二期信行道場の訓育部に携わった立場からすると、昔は道場生の大半が在家出身であった。しかし昨今の信行道場は寺院婦人や一人娘など寺族が大半であり、在家出身者で僧侶を志す人は少ない。もちろん寺族という立場から出家することは、一般よりも仏法に触れる機会があるため歓迎されるべき事であるが、現実には仏道を志したからというよりも住職の急逝や、一人娘が男性教師と結婚するまでの一時的な対応として、仕方なしに信行道場に臨む人が多い。女性教師を増やすために有髪の特別信行道場を復活させようという意見が女性教師側から出ているが、果たしてたった三十五日間の剃髪にさえ抵抗がある人に僧侶になる資格があるのか。現代の感覚からは厳しいと言われることもあるが、本来は相応の覚悟をもって志すべきものが仏道なのではないか。

・西永氏の講演は、浄土真宗の立場からであるということ念頭におかなければならない。浄土真宗は教義上、非僧非俗という立場であるため出家者というよりも一般的なジェンダー論の感覚で発言されているが、日蓮宗は出家者教団である。依経する教えも違う。したがって教義上、浄土真宗僧侶とは感覚に乖離があるので、日蓮宗における女性教師のあり方をそのまま論じることが問題があるのではないか。

・ジェンダー平等とは「一人一人の人間が年齢や性別に関わらず平等に責任や権利や機会を分かち合い、あらゆる物事を一緒に決めること」と定義づけられている。つまり、誰かが一方的に物事を決めるということでは無く、一緒に決めるという姿勢が大切ではないか。

・僧侶と結婚して坊守や寺院婦人とならず、現在働いている仕事を続けたいということは近年の男女共同参画の気風と合致しているが、この問題はどの寺院にも当てはめられる問題ではない。地方など、檀信徒との距離感が近い寺院では「あそこのお寺さんいつ行っても奥さんがいない」と言われてしまう。さらに出家得度している女性教師の場合、「なぜお寺のことをせずに外に働きに出るの?」と言われることがあるだろう。檀信徒目線では、出家して

いる人が一般社会の仕事に就くということに違和感を覚えるのが現実なのかもしれない。

・女性には男性が思うよりも逞しい。布教の場においても女性の力が大きく出せるところは多々あるので、活躍できる場を摘んではいけない。

・創価学会の熱心な活動家も割合的には婦人部が多い。男性教師が思う以上に女性教師は活躍できるはずである。女性だからという理由で表舞台から排除することはせず、機会の平等を設けることによって宗門はさらに飛躍するのではないか。

・女性問題を扱うと必ず話題となるのは堤婆達多品において、童女が变成男子して成仏したという問題であるが、これはあくまで通俗的な話である。経文上には童宮で法華経を聞法した段階で成仏しており、それを信じられない智積菩薩や舍利弗尊者の為に神通力をもって成仏の相を見せただけである。つまり、女性の姿のまま成仏したというのが経文上における童女成仏である。日蓮聖人も同様の立場であり、『法華題目抄』や『祈祷抄』に教示している。したがって变成男子を女性成仏の典拠として用いることは宗義に反することであり、日蓮宗教師として謹まなければならぬ。

・自坊の信者には性転換し、女性から男性になり、その後結婚した人もいる。二十年前では考えられなかったことが、今は現実起きています。現代の我々が、仮に男女の問題を支配するものと支配されるものという括りで考えるのであれば、平等というものを考え直す必要があるのではないか。

【SDGs 2030】

・法華経にSDGsを問うという姿勢は宗門としてあるべき姿であろうか。法華経は仏になることを目的とした經典であり、SDGsを解決するために説かれた經典ではない。現在の宗門はとかく何か社会問題が起きた際、すり寄るよ

うな形で經典や御遺文を切り文的に引用する気風があるが、そのような立場は謹まなければならないのではないか。・そもそもSDGsは大量消費社会で経済が重視されたために生まれた格差を是正しようという立場から生まれた考えである。あらゆる存在が共生し不平等をなくしていこうという考えは法華經の精神と合致する。逆に言えば法華經を現代に活かすという我々が先んじて行わなければならない行動を、SDGsに先を越してしまったという感覚を持っている。

・SDGsが制定された目的は、日本よりも恵まれていない国民のために掲げられた目標である。宗教者として関わるのであれば「信仰心」というものを抜きにして語ることはできない。

二、まとめ

初めてのオンライン開催のため、意見交換がスムーズに行われるかが運営側の課題であった。またSDGsという広汎なテーマとジェンダー問題というデリケートなテーマがあるため、討議の焦点がどのように変化していくのか事前に判断しにくいという点も課題であった。

結果として参加者の関心が多く寄せられたテーマはジェンダー問題についてであった。特に参加者の中に第二期信行道場の訓育主任を務めたことのある女性教師がおり、女性教師の実情や肌感覚についての話が呼び水となり、女性教師の問題から家庭婦人の問題、さらには女人成仏の問題に至るまで活発な討議がなされた。また思いがけぬ結果として、家庭婦人による陰に日向に一生懸命な給仕に対する有り難さを共有する場ともなり、有意義であったといえる。反省点としては、SDGsのテーマが壮大であるために、僧侶一人一人が主体的な問題として考えづらく、受け身の対応となる場面が散見された。テーマの性質上、ディスカッションによって理解を深めにくいということもあり、今後工夫する余地があるように感じられた。

第四分散会

座長 河崎俊宏

副座長 尾形圭照

記録 本間文裕

参加者 十一名

一、運営について

第四分散会では、「個人に目を向ける」「今までの視点を変える」「新たな視点を加える」という運営のテーマを大切にす為、発言者の意見を尊重し、決してそれに対し批判的な発言をしないという注意事項を設定した。

分散会全体の流れとしては、最初に自己紹介と基調報告並びに講師二人による基調講演の感想を述べた後、三つの議題に対し意見交換する形とした。

二、分散会討議

まず、自己紹介や感想の中で多かったのは、SDGsという言葉聞いたことはあるが、内容までは知らなかった為、この中央教研を機会に、今後の学びの糧にしたいという意見であった。

特に、ジェンダー問題については、多様な意見がみられた。

・男女平等と謳っているにもかかわらず、逆差別が発生することや、男女という生物学的に見ても向き不向きがあることを理解し、考え方が暴走することや、行き過ぎに注意すべきである。

・現在、身延山において、男女の僧道実習が設置されており、日蓮宗では教育機関におけるジェンダー問題に積極的に取り組んでいると考えられる。

・女性を軽視することは、社会的に減少傾向にあるとは言いつつも、無意識のうちに女性を軽視してしまうことがあり、この機に自分自身を見つめ直したい。

・自身の問題であるが、結婚する相手の女性がここまで生業としてきた仕事を辞めるべきか、それとも続けながら寺院に入るべきか、どのように解決すべきか探求したい。

・ジェンダー問題では、男性側の足りない部分を指摘されがちだが、問題提起にもあったように、男性教師ならではの悩みもあり、双方の立場を理解した上での議論が大切である。

参加者より意見を頂いた後、座長より、ジェンダーを扱っていく上で大切なことは、「差別」と「区別」という事をしっかりと分けて考える必要があると提言した。

次に、三つの議題に対し、順番に参加者から意見を頂いた。

【SDGsについて日頃から心がけていることや行っていることはあるか】

・結婚当時、妻が家事をすることは当たり前であると思っていたが、妻に少し手伝ってと言われて、初めてそうではないことに気付いた。現在では子供の事や家事を手伝うようになった。

・外国籍の妻と結婚したが、通称としては姓を一緒にしているが、法律上の問題で姓を統一することができない。また、姓を統一できないことにより、疎外感を感じている。寺院の事は、協力しながら執行している。

・逆差別ではないか。ジェンダー問題では、立場の強い男性は叩かれても良いという考え方があっては。

東京オリンピック委員会の会長が、女性蔑視発言の責任を取り、辞任するニュースが流れたが、発言の部分だけを取ってみればそう見えるが、全体の流れの中では女性を蔑視する発言はしていない。

このような雰囲気の中で、男性には何を言っても良いというような風潮があるのではないか。

・パラリンピック競技のトランスジェンダー問題において、女性が男性に変更する場合は除いて、男性が女性に変更する場合は、体力、筋力、又は骨格の違いから考えると、同じフィールドで競技する女性選手にとって、不平等になり、競技においては、「区別」ではなく「差別」になってしまっているのではないか。

トランスジェンダーの出場規定は細かく設定されているが、体質的には男性であるという生物学的な問題があるのではないか。

【SDGs に対し、仏教者はどのように向き合うべきか】

・SDGs は大きく分けて十七の項目があるが、細分化すると多数の項目に分けることができる。しかし、持続可能であるかという重要な一点にまとまるのではないだろうか。

仏教では、草木にも命があるという考えがあるが、キリスト教にはない。人類の為か、自然界の草木の命の為かという、誰の為のサステイナブルであるべきかを考えることが重要である。

仏教の考え方は草木の命を主体に置くことができると思うので、理論的にまとめて次世代に発信することができる。れば、仏教思想に基づくサステイナブル性というものが生まれるのではないだろうか。

・西永氏の講演の中で、教義とSDGs は重なっていると発言したことにより、批判されたという話があったが、仏教で説かれていることをSDGs に融合して伝えることができれば、有効な手段になるのではないか。

個人で活動を続けることは難しいことではあるが、アクションを起こすことは可能である。

・僧侶一人一人が生活の中で手本を示すことが重要である。

個人で取り組む事と、社会や宗門といったような大きな枠で取り組むことを分けて考える必要がある。

・それぞれの違いは個性であり、相手を否定することから始めるのではなく、肯定することから始めることにより、人々の個性を見出すことができるのではないだろうか。

・法華経が歴史上、永く支持されてきた理由には、女人成仏の影響が大きく関係しており、紫式部も女人成仏に感動して和歌を残している。

女人成仏が法華経に説かれていることで、日蓮宗として世界にジェンダー平等を発信していけるのではないだろうか。

・SDGsを利用することは良いが、利用されるのは良くない。

キリスト教・イスラム教・仏教それぞれがSDGsを提唱し過ぎると、それ自体が宗教のような存在になってしまわないだろうか。

また、多様性を説きながらも、皆が同じことをやってしまうと、多様性が薄れてしまうのではないだろうか。

我々は法華経という教えを元に、SDGsに取り組むことが大前提である。

座長は、参加者のSDGsに対する多様な関わり方やあり方を受けて、これを機に、SDGsの項目を再確認し、新しい視点や注意を加えることにより、我々の生活の中で、新たに組み込むべき項目を発見できる可能性があるという意識を持って頂けたら幸いであるとの意見を述べた。

この後、さらにジェンダーの問題を掘り下げ、寺庭婦人の問題についても議論した。

【西永氏の坊守としての体験や生活についてのどのよう感じたか】

- ・寺院の伝統など、古くから継承されているものは大切なものであるから残っているものであり、全てを変えてしまう事は、先人に対して失礼な事で賛同しかねる。
- ・歴史的経緯を無視することは、文化や伝統を蔑ろにすることに繋がり、大切なものを破壊してしまう危険性がある。
- ・浄土真宗本願寺派の教義には、絶対他力という教えがあり、教義とSDGsを一緒に考えてはいけなさと批判されたお話があったが、近年では、自力の部分も大切であると考えられているようであり、教義と矛盾する点が存在し困惑しているという事を本で読んだことがある。
- ・坊守の立場としての話であったが、逆に住職の立場であったらどう対応されたのだろうか。これは役割の話であって、きちんと役割分担できていれば解決できた話ではないだろうか。
- ・それぞれの地域性が存在している。
- ・個人的には個人のやりたいことを尊重するが、個人と地域のどちらを大切にするかは、見方をも一つ変えるだけで結果は大きく変化する為、どちらが正しいと判断することは難しいのではないだろうか。
- 例えば、原子力に携わる地域では、原子力関連の仕事の方が多く、地域に暮らす人々の生活に必要なものとなっている為、原発は危険だから廃止すべきであると簡単には言えないことなどが挙げられる。
- ・自分一人で生きていかななくてはならない状況になった場合のことを考えると、寺院に嫁ぐことによって、能力、生きがい又は金銭的なものを得る機会を失うことになってしまう。
- ・従業員として寺院婦人を雇用して、収入や保障の部分を整えることにより、万が一のことが起きた時にも、金銭的な不安を解決できるのではないか。
- ・若くて経験が浅いからこそ、良き先達が存在していれば、重圧や悩みを軽減することができたのではないか。

意見の中に、立場が逆であったら、そのような状況は起こらなかったのではないかと発言があり、この点について座長より我々は波風を立てずに解決することを選ぶのではなく、新しい視点をどのように加えることにより解決できるのか、ということを大切に頂きたいと参加者に伝えた。

ここで、座長の指示により、運営側の体験談を述べた。

まず、人材育成会社の運営に携わる副座長より、ジェンダーの問題は、男女の相違を述べる事ではなく、「男も女もみんな人間」という一つの括りで考える方が良いのではないかと。

性別という枠を壊して「一人の人間」として考える時、違いがあるとしたらそれは「個性」となり、それぞれの能力を互いに認めていくことができれば、ジェンダーの問題は解決していけるのではないかと。

また、寺庭婦人向けの研修をしている中で、寺庭婦人の方々は、寺院の中で活躍し、「自分を認めてもらえる場所」を求めているのではないかと感じている。

寺庭婦人が、寺院や地域の中で、グリーンフケアなどの分野で活躍し、住職をサポートすることにより、「居場所」ができるということが、一番の理想なのではないだろうか。

寺庭婦人としての「居場所」ができれば、寺院における寺庭婦人の在り方も変化するのではないだろうか。

更に記録より、我々僧侶は、自分自身が出家して寺院に入っているが、寺庭婦人は一般社会から嫁がれた方が多数を占めており、その中には一般社会での仕事を生きがいにしてきた方もいるのではないだろうか。

留守番などで、自由を拘束され、生きがいであった仕事を退職するしかなかったのであれば、それはどれだけ苦痛なことであるかを、我々僧侶は知る必要があり、今後の寺院や寺庭婦人の多様な在り方を考えていくことが、課題であると肌を感じている。

三、まとめ

第四分散会では、第一にSDGsについて、第二にSDGsと仏教について、第三に寺庭婦人におけるジェンダー問題について掘り下げて議論された。

参加者はSDGsに対してとても意識が高く、各々が問題意識を持って取り組み、多様な意見を頂いた。

また賛否もそれぞれ分かれたが、「個に目を向ける」ということを実践することにより、それぞれの発言者の意見を尊重することができ、「今までの視点を変える」「新しい視点を加える」という、第四分散会の運営テーマを達成することができた。

参加者には、この度の中央教研の「新たな教師像を構築する」という学びを大切にして頂き、我々僧侶がもっと深く世の中のことを見渡し、それぞれに多様な在り方が存在するという意識を持って、今後のSDGsを深く考えて頂くことを願う。

国際パラリンピック委員会が制定する、四つの価値の「公平」の部分に提唱されている、「多様性を認め、創意工夫をすれば、誰もが同じスタートラインに立てることを気づかせる力」という言葉がある。

沢山の人が共存する世界で、「個性」という多様な能力を認め合い、創意工夫し、互いに認め合う事によって、「一人の人間」として、SDGsという目標に共通の意識を持って、取り組んでいくことが大切であるという大きな学びを得た。

第五分散会

座長 及川一晋

副座長 中村龍央・古河良啓

記録 齋藤宣裕

参加者 十名

一、運営について

今回は初めてオンラインで分散会が開催されたが、参加者は概ね抵抗感なく参加していた。しかしオンラインの性質上、積極的に拳手をして発言することが難しい様子も見られたため、オンラインの分散会においてはさらなる工夫と検討の余地があるように感じた。

二、分散会討議

まず、参加者全員が自己紹介と講演並びに問題提起への感想を述べた。

ほぼ全員から宗門内の女性参画、寺院及び家庭内でのジェンダー平等が進んでいないという現状について言及があった。主な感想は次の通りであった。

【講演並びに問題提起の感想】

○SDGs

- ・SDGsという名前はよく耳にするようになったが、自坊ではまだ何も取り組むことができていない。

○ジェンダー

- ・ジェンダーについて考える前提として、まずはお互いのことを尊重する姿勢が重要であり、平等はその先の話である。男性、女性という性別よりもまずは個人としての尊重を重視すべきである。

- ・全国日蓮宗女性教師の会は現在、会員が約一六〇名いるが、その中でも活動できている女性教師は三十〜四十名しかない。女性教師が活動しづらいというのが日蓮宗の現状だと思う。

ここで参加者より、寺院のジェンダーについて考える切り口として、それぞれの寺院で積極的に運営に携わっている世話人の女性比率について質問が出た。

地域性による影響もあるが、多くの参加者の寺院ではまだ男性が多く、女性にもっと寺院の運営に参加してもらいたい、という気持ちはあっても早急な実現は難しい現状が明らかになった。

また男女で役割分担をしているつもりであったが、区別ではなく差別になっていたかもしれない、という反省の言葉もあった。

宗門内でも大規模な法要や葬儀には女性教師の参加が認められないというケースがあったようで、今後の改善を求める声が上がった。また、その際には女性教師の頭髪を短髪にする必要があるか、という問題についても言及があり、今後の課題として挙げられた。その一方、この度の宗祖御降誕八〇〇年記念法要では女性教師の活躍も伝えられており、少しずつ変化の兆しが見られるという話が報告された。

続いて、これまでの話を踏まえて「これから寺院でどのような活動を行なうべきか」という点について話し合わせ、主に次の通りの発言があった。

【これから寺院でどのような活動を行うべきか】

○SDGs

- ・SDGsの取り組みとして近年注目されている「おてらおやつクラブ」の活動を参考にして、お盆のお供え物を近隣の子どもたちへ配布する取り組みをおこなったところ、檀信徒が喜んで協力してくれて手ごたえを感じた。
- ・これからの寺院は社会と積極的に関わり接点を増やす必要がある。
- ・活動を檀信徒へどんどん発信していく必要がある。
- ・自坊の良い点、悪い点を再点検して檀信徒や地域の人たちと共有することで新しい活動が生まれるかもしれない。
- ・写経会の際にお茶菓子やお茶を地域のお店の人に提供してもらったところ好評だった。今後はますます寺院が地域をつなぐ活動が望まれる。
- ・活動の前提として寺院の信用が重要である。信用されるためには、寺院の情報の積極的な開示が必要ではないか。
- ・男女の性差と同様に、宗門には大規模寺院と小規模寺院との格差是正も行ってほしい。

○ジェンダー

- ・身延山久遠寺では今後、女性教師の法要参列が進む可能性がある。総本山が変わると、宗門全体への影響力が大きいはずである。

三、まとめ

最後に座長より、SDGsやジェンダーについては多様な立場の人が話し合いの場を継続していくことが重要ではないか、という提案が述べられ終了となった。

第六分散会

座長 岩田親静

副座長 福島正堯・成田東吾

記録 鈴木宏彰

参加者 九名

一、運営について

第六分散会ではまず、座長の挨拶の後、チェックインとして管区と氏名を述べ、話し終えた人が次に発表する人を指名する形でそれぞれ自己紹介を行った。

二、分散会討議

次に、講演の感想や、SDGsに関して思っていることを一人ずつ述べていただいた。肯定的・否定的な意見の両方が述べられたが、数値化することについては抵抗感がある一方、男女格差はあるという認識が皆共通であった。主なコメントは次の通りである。

- ・SDGsに対してあまり肯定的ではない。トレンド化しており、掲げている団体・企業等が良いことをしているような雰囲気、実際はビジネスとして利用しているケースもあるのでは。
- ・それぞれの国家において大切にされてきた価値基準は違うはずなのに、国連で話し合われた価値基準を全世界に広

げて価値の一元化を行っているような印象を感じた。

・SDGsから我々を考えるのではなく、仏法からSDGsを考えていく方向に仏教者はいなければいけないのではないか。

・ジェンダー問題は何をもって解決なのか。数字的な問題なのか、単に数値を比べて評価をするというのは疑問を感じる。

・元々本宗が掲げている男女格差などの問題については改革していく必要があると感じている。

・自坊は過疎化が進んでいる。二〜三十年後は檀家が半減するのでは、という状況にある。あと少しで傾いてしまうような寺院が沢山あるなかで、この先持続させるにはどうすればよいかをまず考えなければ。

・数値が低いからと言って国民の満足度は低いのだろうか。

・私は肯定的に捉えている。企業のアピールになっている面もあるかもしれないが、取り組みによって問題が明るみになる部分があるのでは。

・講演いただいた先生も今までの生活で当たり前のことだと思わず議論することが大事と仰っていた。時間がかかるかもしれないが、問題を認識して取り組むことが大事なのではと思う。

・日蓮宗は世の中に通ずる教えと学んできたので、本宗としては肯定的にみてもよいのでは。

ここで座長より、男女の格差について問題提起がなされた。本宗では女性教師が少なかった頃、女性教師が導師を務める葬儀に嫌悪感を示す男性教師がいたことや、仏教的な価値観でSDGsをもう一度見直した方が良いのでは、という意見が出た。主なコメントは次の通りである。

・過去、女性教師がまだ数少ない頃、先輩から女性教師に葬儀をしてもらいたくないという話を聞いたことがある。当時は女性教師を内陣に入れることに抵抗感を感じる男性教師もいた。

・最近では女性教師が増え、昔に比べたら格差はある程度軽減されたが、某地域では袴をはくことすら禁止されたという経緯をもっている女性教師もいるのでまだまだ格差はあるように感じる。

・色々な場面でどちらかが上の立場でどちらかが下という立場は往々にしてある。それが全部差別なのだろうか。「差を認める」ということが本来のありかたなのでは。

・男だから、女だからではなく、違いがあることを認めた上で、私が出来ないことは「お願いします」、私ができることは「させていただく」という考え方で、違いを補完し支え合っていくということを仏教的な観念で説いていかなければいけないと思う。

・私たちはSDGsではなく仏法においてどう説かれているのか改めて学び直す必要があり、学び直した観点からSDGsとして取り組むべきところを考えるべきでは。

・基調報告の中で、お茶汲みをする女性教師の事例があったが、さっと周りにお茶を汲めるような気遣いを、淹れてもらった側はそれを当たり前だと思わずに、私たちは至らなかつたけど有難いことなんだと認識して共有できれば、思いやりの心を育んでいけるのでは。

・格差として事例を出されると、個々で解決できることを社会全体に広げて問題を大きく取り上げすぎているように感じる。

お茶汲みの話について、淹れる女性側が「しかなかったか」というところに問題があるのではと座長より言及があり、男性側の論理や価値観で「女性だからやらなきゃいけない」と思わせるように仕向けてはいないだろうかと指摘がな

された。そのことについて、女性教師からは「同調圧力を感じる部分はある」という発言があった。

さらに、「女性側がどう思うか」ということを掘り下げて考えるため、夫婦でどれだけ家事を分担して行えているか、普段の生活について座長より問いかけがなされた。主なコメントは次の通りである。

- ・自分ができることはやる、できないことは妻がやってくれている。私の家庭では調理場に入ると妻に怒られてしまう。役割分担しているという意識を持っている。
- ・男女関係なく、お互いに補うことが大事だと思う。私の家庭では妻が体調不良や所用のときは家事を手伝うようにしている。
- ・仕事は私がやって、家事は妻がやるという形。頭が上がらないのが正直なところ。知らないうちに「おじいさんは山にしばかりに、おばあさんは川へ洗濯に」というような昔からの価値観に染まっていたのだなと気付いた。
- ・家事はほとんど妻にお任せしているような形。ただ、個々の家庭のことをジェンダー問題として取り上げてしまうのは疑問を感じる。

以上、男性教師の発言を受けた上で、女性教師より、「それぞれの家庭で役割分担ができてきているのであればよろしいかと思う。役割はこれだと決めつけて任せきりにするのではなく、寺族が困っているときは耳を傾け、気遣いや対話があればお互い安心して過ごせるのでは」と述べられた。家庭内でも男性本意になることなく、「対話すること」が大切であると指摘がなされた。

「ワークシヨップ」

二つの問いをたてて各々自分ならどう対応するか、考えるワークを行った。

まず、「あなたがお付き合いしている方は、ジェンダーギャップがある女性でした。昨日お亡くなりになり、彼女の家族は『信士』を戒名に付けたいと言っています。あなたはどう思いますか?」「また、パートナーと家族で戒名の『信士』『信女』のいずれにするかを討論しています。あなたが住職の場合どう助言しますか」というテーマで参加者に意見を出していただいた。主なコメントは次の通りである。

- ・戒名については本人の意思に任せたいが、事前に意思を表示していなかった場合は私自身答えを持っていない。自坊では二十年ほど前にジェンダーギャップがある人の葬儀をしたことがある。日蓮宗で公式には認められていないが、ご本人が納得した上で先代が「法師」とつけた。法華経では法華経を護るものとして男女問わず「法師」として認定している。法要式では未教師に当てはめられるものだが、これからは信士・信女両方に抵抗がある場合、第三の戒名として、ジェンダーギャップのある方に提示できるのではないか。
- ・仲間内でも以前話し合ったことがある内容だが、まだ答えを導き出した者はいない。現状ではやはりご遺族の意向が大事かと思う。
- ・本人の意思が一番大事だが、事前に意思表示がなければ遺族の意向を考慮しなければならない。
- ・本人の思いを知っているならばそれに応えられるような言葉がけが遺族にできればと思う。本人と遺族との間で考えのずれ違いがあり、嫌な思いをさしてしまうようであれば「信士」「信女」は外しても良いのではないか。
- ・子どもがいるかいないか、後に供養をする遺族の意見が尊重される。
- ・安楽行品に「五種不男」という言葉があるように、釈尊の時代からある問題と受け止めている。男性でも信女、女

性でも信士を用いて良いだろうし、過去を振り返れば武田信玄の戒名は「法性院機山徳栄軒信玄」、上杉謙信は「不識院殿真光謙信」というように、位号がない戒名も良いのでは。

以上の発言を受け、「本人の意思が大事」であり、その上で、後に遺恨を残すようであれば「信士」「信女」の二択では厳しい、という意見が主だったことが、総括として一同で共有された。

次の設問では、

「あなたは六十歳の男性教師です。二十歳代の僧侶なりたての若者たちに給仕しなければならないことになっていきます。どんなことを思うでしょうか？」

「前記の問から、男性教師、女性教師は本来、どう立ち居ふるまうべきでしょうか？」
というテーマでそれぞれ意見を出していただいた。主なコメントは次の通りである。

- ・ 仏教で説かれるのは給仕第一なので給仕することは苦ではない。社会通念としてそうしなければならない、というような価値観があることには異を唱える必要性を感じる。
- ・ 社会通念を変えていくときの理想となる価値基準はもつと議論していかなければならない。仏教教団で考えるならば、なりたての者が給仕するのが教団内のルールではあるが、それが正しいことかどうかは判断しかねる。対話の中で、共有する価値観を生み出していかなければいけないのだろうと思う。
- ・ 私自身はもうすぐ六十歳だが、若い人へ給仕することに抵抗がないため、周りから止められることもある。
- ・ 僧堂生活を長く送っていると師厳道尊、師僧あつての僧侶。年配でなりたての僧侶もいれば若くして経験を積んで

いる僧侶もいる。見た目だけではわからないことが沢山ある。ただ、もし自分がその立場で同調圧力など感じるようであれば、お茶を汲むにしても、年下の僧侶に不満を感じてしまうだろう。

・性別や年齢など関係なく、皆が進んで気付いたときにできるようになればと思う。若い人や女性がするのが当たり前という風潮ではなく、「誰がやっても良い」というような社会になれば。

二つ目の設問では、「同調圧力をかけてはいけなし、異を唱えることも必要」「男性女性分け隔てなく、やれるものがやれば良いのでは」という意見が多く、休憩前の討議で話し合われたように「対話することが大事」ということにつながってくるのではと、座長より総括がなされた。

【今後の取り組みについて】

最後に、SDGsやジェンダーの問題など、それぞれの自坊で今後どのような取り組みをすることが考えられるか意見が交わされた。主なコメントは次の通り。

- ・女性教師の数を増やしていくことが大事かと思う。
- ・寺院ではジェンダーギャップのある方に対して、位号をなくしたり、「法師」という選択肢もあるよということの説明して、受け入れられるような形を構築し、広げていきたい。
- ・寺院は人が集まる場所なので、トイレや着替えの場所など設備的な面でも、周りの意見を聞きながらオープンな雰囲気で作りができればと思う。
- ・檀家総代に女性を入れていくことも必要。管区でも総代に女性を入れている寺院がある。村社会というわけではな

いが、まだまだ総代になるのは男性という意識があるので変えていきたい。

・自坊では行事があれば家族の意見を聞くようにしている。いろいろな価値観を共有することも寺院では大事なこと。対話しながら共通の理解を深め、根本となる仏法をより一層学んでいければと思う。

・相手にとって何が一番良いことか考え、耳を傾けながら話を聴くようにしたい。

二、まとめ

国連が提唱するSDGs自体には懐疑的な意見も多かったが、男女格差などの今起きている問題について考えるきっかけとしては、一同肯定的に捉えているように感じた。また、討議やワークが進むにつれて全体の意見が「対話が重要」「同調圧力をかけてはいけない」という意識に変わってきた印象を受けた。参加者各自、初のリモート開催で時間も限られているなか、有意義な話し合いができたと思われる。

第七分散会

座長 横山正見

副座長 中條曉仁

記録 藤崎善隆・吉木祥介

参加者 十名

一、運営について

年齢は三十代から七十代、所属管区は九州から北海道まで、女性教師の参加は一名であった。

冒頭に各自の自己紹介を行い、副座長の中條師より、継続的に調査研究を行っている過疎寺院の問題について、ジエンダーの視点から話題提供を行った。その後、参加者から「寺院をめぐるジエンダー的事象」について日々感じていることや事例報告を受け、意見交換を行った。最後にこれから取り組むことなど、今後の検討課題について議論した。

二、分散会討議

【過疎寺院とジエンダー的事象について】

中條師は過疎寺院についての調査研究の経験から、ジエンダーに関わる事例を紹介し、問題提起を行った。具体的には、寺院に女性の子どものみがいる場合、住職が亡くなった後、後継者を探すことが出来ずに寺族が寺院を出てしまった事例、又は女性が寺庭婦人として寺院を維持管理している事例を紹介した。どちらも女性寺族が教師資格を取

得していれば専任住職を確保できるが、そのような事例はほとんど見当たらず、男性教師が代務住職を担っているという。暗黙の裡に、僧侶は男性、住職後継者は住職の息子でなくてはならない、という意識が寺族や檀信徒に定着しているのではないかと指摘した。

その他、男性教師の未婚率の上昇、寺族の核家族化による女性寺族の減少など、寺院を取り巻く社会環境の変化を紹介した。過疎寺院の問題など、現代的な課題を考えるうえで、男性は僧侶、女性は寺庭婦人、という寺族内の性別役割分業を変えていくことはできるのか等、「寺院を巡るジェンダー的事象」を考えることが重要である、と述べた。

【参加者の報告】

続いて、参加者から「寺院を巡るジェンダー的事象」について発言を求めた。左に、発言の概略を紹介する。発言に応答があった場合は「↓」以下に内容を記載している。

・墓参にやってくるのは女性が多く、寺院との日常的な関わりは女性檀信徒がメインだが、総代は男性檀信徒で構成されるため、寺院運営に関わる意思決定は男性の意見が反映される。女性教師や女性住職を求める声はほとんど上がっていない。

・世代によってジェンダーの意識は異なる。ジェンダー平等を考えた檀信徒教化を行いたいが出来ておらず、歯がゆい思いをしている。若い僧侶の方が柔軟にアプローチできている。

・子どもが女性だけの寺院で、婿として男性教師を迎えたが、その後離婚した事例を聞いたことがある。その際に元々寺族だった妻が寺院に残るか、婿として寺院に入った夫が残るか、難しい問題になったと聞いたことがある。

・女性教師として住職を継承した後に、離檀した檀家があり、悔しい思いをした。お酒の席で、男性教師からお酌の役やダンスの相手を求められたことがある。男性教師であれば求められない役割を求められた。女性教師は「僧侶」よりも「女性」としてみられる経験が多いのも事実である。

・女性が僧侶を志す際に、剃髪が大きなハードルになる。剃髪を再考してもよいのではないだろうか。男性教師でも、兼業で働いている人の場合は剃髪に対して柔軟な対応を求める意見はあるだろう。

↓僧侶になるということは、釈尊の弟子になることで剃髪は昔からの習わしだと考えている。剃髪か短髪かという検討はあるが、男女ともに髪を切ることが男女平等なのではないか。

・長男に事情があり寺院を継がずに、次男が寺院を継ぐ予定であるが、なぜ長男が継がないのか、という意見がある。「男性、長子が継ぐ」という規範意識が強く残っていると感じる。このような規範意識を変えていければジェンダーを含めた様々な問題に取り組みことが出来る。

・ジェンダーの問題は「女性のこと」と考えていたが、男性が大きく関わる問題であると考えようになった。寺院の夫婦関係でも、男性の家事参加、育児参加が大切であると感じている。

・子どもは四名（女性のみ）いるが、出産の度に檀信徒から男性の子どもを求める声がある。ジェンダーの問題を知り、住職を男性に限らないような考えが広まってほしい、と思いを新たにしたい。

・子どもは女性のみだが、子どもを女性教師として寺院を継ぐように育てるのか、男性の婿を迎えて寺院を継ぐように育てるのか、どちらがいいのか考えている。男性の婿を迎える場合、子どもに補佐する立場になりなさい、と言っているようで気乗りがしないが、一般的な形だと思っている。

・LGBTQ（性的マイノリティ）の方が亡くなった時の戒名について、本人と家族が納得する形を考えている。皆さんの考えを聞かせて欲しい。

↓生前に本人と向きあい、本人の性自認などセクシャリテイについてお話を伺い、その上で、仏教者としての戒名の考え方を伝え、納得できる死の迎え方をともに考えることが大切ではないか。セクシャリテイを話し合えるような信頼関係を構築することが欠かせないと考えている。場合によっては俗名という形もあるのではないかと。どのような形であっても死後の安心を伝えることが大切だと考えている。

↓性別変更のハードルはさがっているように感じる。戸籍を基準に考えたらいいのではないかと。俗名には抵抗がある。

↓トランスジェンダーの方すべてが戸籍を変えているわけではないので、戸籍は一つの基準ではあるが、戸籍のみでは漏れてしまう人が出てくる。

【これからの僧侶像や取り組み】

・身近なところから、男女に分ける必要があるかを見直すことが重要であろう。例えば、所属管区では、法要の参列者を男性席と女性席を分けることがある。深い意味はなく、慣例として残っているものだが、このような身近な事例を再検討することが大切だと考えている。

・社会に関わることは僧侶のあり方を訴えることでもある。変化が激しい現代社会に関わる際に、僧侶がジェンダーの視点を持つことは大切なことである。僧侶の姿勢で檀信徒の考え方が変わり、社会の価値観が変化していくものと思っている。

・男性の世界に女性が進出することは、新たなあり方を提示することになるが、一方で生活スタイルや価値観等の相違から予期せぬ葛藤が起ることも考えられる。その際に、調整する機能をいかに持たせるかの検討が必要だろう。加えて、ジェンダーに関する研修会や講演会など地道な理解啓発も欠かせない。

三、まとめ

ジェンダー的事象は社会の様々な側面に影響を及ぼしており、それは寺院においても例外ではないことをうかがい知ることが出来た。特にジェンダーの問題が顕在化するのは住職後継者を考える時である。女性が教師に成れないという規約はなく、住職に就任できないという規約もない。しかし、寺院としても、檀信徒からも男性を求める傾向が根強くあることを痛感した。まさに「アンコンシャスバイアス (unconscious bias)」（無意識の思い込み、偏見）である。その裏には、例えば檀家総代の男女比を指摘する声があったように、社会構造に目を向ける必要がある。

一方で、従来の男性中心の寺院運営では立ち行かなくなっている現状があることも事実である。社会の変化にあわせて、柔軟に対応、変化していくことが求められる。女性の役割を広げていくことが一つの取り組みになるだろうが、その際に、男性の代わりとして女性教師に目を向けるのではなく、積極的に女性が教師として活躍したい、と思えるような宗門であることを願っている。実現したならば新たな教師像を創造し、寺院のあり方にも変化をもたらすであろう。

更に、ジェンダーバランスの変化をより肯定的に受け入れ、進めるためにいくつかの方策が検討された。例えば、ジェンダーに関する理解啓発、女性が働きやすい環境整備などの制度設計、トラブル対応などの調整機能をどのように作るのか、複合的な取り組みが求められる。今後、先進事例の共有やロールモデルの検討など、具体的な検討が望まれる。今回の中央教研はその第一歩となった。

付記

研修会や分科会の議論内容について、後日、筆者は妻と意見交換の機会を持った。寺院の運営においてジェンダー

の視点を持つことは寺院の維持・発展に欠かせないだろうということに加えて、男性の子どもへの過度な期待を見直すことは、寺院に嫁いだ女性の心理的・肉体的な負荷を軽減するものになるだろう、と述べていた。共感する方も多いのではないか、と思いい付記させて頂く。

参考文献

中條曉仁（二〇二〇）「調査報告 過疎寺院の現状とゆくえを考える ―広島県北部寺院調査から―」『現代宗教研究』第五十四号 二二七～二三七頁

第八分散会

座長 伊藤瑞康

副座長 鈴木隆泰

記録 高野光弘

参加者 十名

一、運営について

玄題三唱、座長挨拶の後、参加者それぞれの問題意識や議論を深めたい点について自由に積極的に語ってください、という説明をしてから、自己紹介と基調講演を聞いての感想等を募った。

二、分散会討議

【基調講演の感想等】

- ・SDGsについて考えるところはある。地元は過疎地域で課題が多い。その中で教育格差、貧困、寺院で何ができるかというところを話したい。
- ・檀信徒の自宅での読経・法事に際し時間指定を希望してくるケースが多くなってきており、共働き世帯の増加を感じている。これまで女性が自宅にいるというところに頼っていたんだなと感じている。
- ・妻と母と寺庭婦人が二人いるが、講演を聞いて、何も説明をせずに当然のこのようにしてもらっていたことが多々あるなど反省させられた。同時に、寺庭婦人から自分の仕事をしたいという主張をされると、いままでと同じ

ような寺院の護持運営ができないのではと心配している。

・月廻りがメインで午前は僧侶が寺を空けることが多い。その間寺院を守ってくれるのは妻や母であるので、尊敬の念を持ちながら双方納得のいくような仕事の住み分けをしていかないといけない。

・女性が参拝されたときに不便を感じたり嫌な思いをされることもあるかもしれない、と考えて配慮していきたいと思った。

・社会に出ずにこの業界に入ってきた中で、実体験の中で男女不平等を感じたことはなかった気がした。今回の講演を聞いて、「嫌なことはやるな。嫌なことはやりたくない」と堂々と言っていいんだ、という風に聞こえた部分もある。

・講演内容は（女性教師の立場として）自分にもあったな、という思いもある。着替えの場所の問題などは気遣いが段々ひろがっていると感じる。

・東京はマシだが、地方では差別があると聞いている。

・SDGsについては、食に関して、ひとり親世帯などにいきわたるような、一般社会において平等に食に困らない世界になっていけばいいと思う。

・ジェンダー平等について、納得いかなかったところもある。平等と公平は違う。男性だからこそできる仕事、女性だからこそできる仕事もある。差別について、役割について、納得できるように考えたい。

・SDGsについては大きな目標があるが、身近なところからやっていけないか、と考えている。身近な檀家への対応や寺院運営について取り入れて考えていけたらと思う。

・妻のことを念頭に講演を聴いていた。妻も仕事を辞めて寺院に入った人間なので、「住職に何かあったら自分一人でも生きていけるのかなという不安はある」という気持ちを聞いたことがある。寺院の動き方や役割などの構造に

とらわれてしまうと、それが崩れたときにおかしくなってしまうこともあるのかと思う。

・「こうせざるを得ない」ではなくて、「選択肢がある中でこちらを選ぶ」という流れになると納得できると思う。

・寺院婦人と教師資格をもった娘の力に頼っているのも、女性の力を身近に感じている。差別意識はないつもりだったが、基調講演を聞いて、気付かないところで差別意識があるのかもしれない、見つめなおさないといけないかもしれないと気付かされた。

【参加者の感想等の発言をうけて】

基調講演の感想からはジェンダー問題に関する意見が多かったため、現実の日蓮宗寺院で起きていること、身近なところを掘り下げていくことになった。寺院の構造の中で女性に頼っている部分があると思われるが、その中で女性が差別されていたり、女性の地位が低いといった、男性が気付いていない女性への意識などがあるのかについて、まず参加の女性教師に意見を求めた。

・父の遷化から、寺族ということでゼロの状態から僧侶を目指した。葬儀にも行ったことがない状態であったので最初は自信もなかった。葬儀会場で、住職だと思われぬ。挨拶も軽く、荷物も持ってくれない、と見た目で判断されていたが、お勤めの後は荷物を持ってもらったりと扱いが変わったりした。そういう経験からは、馬鹿にされているような感じもしていた。

女性教師は数も少なく、学びの場が少ない。女性教師としての資質を上げなければという考えから、全ての女性教師が自信をもってやっていけるように、勉強会を開催したりしている。

この意見に対して、他の参加者より様々な意見が上がった。

・檀信徒の目としても、住職は男性でないと、という空気があったりする。地域によっては荒行に行って一人前、という風潮もある。周りの目や雰囲気や構造、環境は女性教師が自信を持ちにくいのではないか。

・寺院の中でジェンダー平等とは、信徒よりも寺庭婦人に対しての話だろうと思う。個々の心の中にある「こうあるべきだ」が色濃く反映されていることを考えると、個々の意識をどう変えていくか、まずは我々が当たり前だと思っていることが実はそうではない、ということに気付き改めていくことが必要と感じた。

・我々の中にも色々な「当たり前」があるのだろうと思う。葬儀導師が男性教師でなければならない、という地域もあったと聞いている。

・全ての僧侶が葬儀をしなければいけない、というのも「思い込み」かもしれない。個々の僧侶が強みを生かしていくという意味で、全て同じことをしていかなくてもいいのではないか。

・長く結婚式のアルバイトをしているが、女性が八割の職場。その中で男性は着替えのスペースがないこともあり、「男性差別」を感じるときもある。その時は女性主流の職場で働いているのだから仕方ないと受け取る部分もある。同様に、例えば災害が起こったときによく言われる「女性・子供から先に逃げて」も、逆に男性差別ではないかという見方もできる。あまりに「女性優先で」という意見が大きくなりすぎると、男性の居場所がなくなる。男女の固定的な役割分担をおかしいというばかりでも良くない気がする。

・男女の役割分担をどう見るか。固定され過ぎていて良くない。「女性の権利を」という意見も大事だが、それで役割分担をつぶすことも良くない面がある。

・ジェンダー問題は社会的に構築された性差の問題であるので、男性が差別されたり抑圧されたりしている部分についても議論の対象になる。

・「男女が同じことをする必要はない。男は男の役割を、女は女の役割を果たしていればいい」という役割分担は、私にとってはわかりやすい。しかし、女性が本当はやりたかったことが、男性の仕事だと思われていることでやらせてもらえない、ということがあり得る。それは女性の視点に立って見ないとわからない。男性が役割分担で決まったことをやっていたらいい、と思っても、女性は決まった役割を押し付けたくはない、と思うこともあるので難しいと思う。

・男性でも、女性が多い職業や、極端に言えば母親になってみたいということも思っても、なかなかできないことがあるが、相対的に女性の方が抑圧される分野が多いということかもしれない。

・個人的には「男は泣くものじゃない」などの男性差別もあるのではないかと感じている。男性でもジェンダーギャップで苦しんでいる側面はある。

【「女性総代」等、女性役員に関する意見交換】

・自坊での次代の総代を選定していく中で、女性も総代に入ってもらった方がいい、という意見が檀家から出てきている。これまで女性総代がいなかったため、どのようになっていくのか想像しにくい。参加者の中ですでに女性総代がいるところがあれば意見をうかがいたい。

・女性の世話人だが、ここ四〜五年で急激に増えてきた。非常に頼りになる方がいるので、女性の力は大きいと思う。女性に進出していただいた方がいいと感じる。

・護持会役員の約三割が女性。女性の方が時間を守ってくれるし、女性がいた方が難しい話になりにくい。頑固で難しいことを言う総代さんも、女性がいると柔らかくなったたりする。

・自坊の女性総代は比較的若いので、年配の方にかわいがられている。

- ・女性総代、という発想が出てこなかった。無意識の縛りになっていた。
- ・寺院での話し合いで、無意識に男女の席が分かれることに慣れていた。
- ・女性総代に会ったことがないが、総代の妻から意見を聞くことはあるので、女性がいて頂くことは寺院にとって大事なことだと思う。
- ・政治の現場や役員のように、「何分の一が女性でなければならない」と決めてしまうのも違う気はする。
- ・女性総代はいないが婦人会が活発。男性より女性の方が熱心な方が多い。行事の提案や寺院の在り方についても意見を出してくれる。ただ、ジェンダー平等を考えるなら、「婦人会」という区別も良くないものになっていくのか、心配ではある。
- ・専業主婦が婦人会などに出やすいという面もあると思う。自坊はサラリーマン家庭が多く婦人会はない。むしろ共働き世帯が増えていった先、婦人会を維持できるのかという心配がある。
- ・護持会の役員の中に四人ほど女性がいる。年末の大掃除のとき、男性は草刈りや枝払いなどの大雑把なところを担い、女性は男性が気付かないようなところをカバーしてやってもらっている。
- ・寺庭婦人も女性として、檀家が住職には言いづらいことを聞いてもらえている。寺院のためになっていると思う。
- ・女性は「家の中」に活躍の場が多くあった。昔は「女性は外に出るな」「法事中には本堂に入るな」という風潮もあった。女性教師が住職になると、檀家が「住職に話をしやすくなった」という意見を持つことも多々ある。住職が強面だと話しづらいので檀家が話しやすい雰囲気づくりが大切だと思う。
- ・世間話的な会話で女性と接していくなどの工夫があると良い。お茶汲みに関しては、男性よりも女性の方が気付くのが早いということかもしれない。男性は目的にまっすぐ行くが、女性は色んな所に目が向きやすい、という話もある。
- ・女性の方が良く気付く、視野が広い、というのも固定的な役割分担に一役買っているのかもしれない。

- ・話が広くなったり狭くなったりしていると感じる。個人としてのジェンダーの問題、団体としての寺院の問題、教団としての日蓮宗の問題、どれを気にしなければいけないのか。ルールを決めてやっていけばいいという話でもないと思う。具体的に何をどうしたらいいかがわからない。
- ・段階に分けて考えるのは大切。今回の開催趣旨としては、理想の教師像をそれぞれに考えるための素材、刺激を持って帰ってもらいたい。

【女性教師の進出、有髪の問題について】

- ・「僧侶は男性」という固定観念があるのでは。
- ・伝統教団の中では日蓮宗は女性教師数が多い方なので進出には大賛成。
- ・信行道場の有髪禁止も撤廃して、信行道場に入りやすくすることで女性教師を増やし、活躍の場を広げてもらえたらいいと思う。
- ・女性教師だからといって特別思うことはない。僧団は男性教師が多い社会だと理解した上で、出家得度されればいいと思う。
- ・有髪の女性教師が増えることは大歓迎。
- ・女性教師が増えて欲しいとは思っている。有髪での信行道場もOKにしたなら、足踏みしている人が教師になってくれることもあるのでは。男性と一緒にできないといけない、という考えは変えていかないといけないと思う。
- ・男女平等というのであれば、男性が剃髪なら女性も剃髪、女性の有髪をOKにするなら、男性もOKにすべきではないかと思う。
- ・平成最後の有髪の信行道場を出たが、身延山のルールとして、有髪は内陣に入れないことになっている。水行をし

て濡れた髪のまま補教帽を被って通勤に参列することになる。しかし、髪があると気が抜けている感じがして、私は嫌だった。有髪の信行道場では居士衣も着られなかった。

・全国的に新しく教師になる人が減っていて、今後教団を維持するだけの教師がいなくなっていくのではないかと、という現状で、協力していただける人手として女性にもどんどん教師になっていただけたらという思いがある。有髪の問題も、それが信行道場に入場する際の障害になっているようであれば取り払うことも必要だと思う。

・女性教師が増えることは賛成。女性が教師になる時のハードルとして剃髪があるのかどうかかわからない。どうしても理由があって剃れないのであれば変えていく必要があるが、どうしてもという理由がないのであれば、気合が入るので剃った方がよいのではと思う。

二、まとめ

第八分散会では、基調講演の内容を受けてジェンダー問題についての議論を深めることとなった。教団、寺院、個人と複数のレベルにおけるジェンダー問題について意見を交わす中で、特に「女性の進出には賛成」・「女性の協力は必要」であるという意見が多く語られ、同時に「能力や資質に基づく役割分担」までも解体することの危うさも議論された。また、宗内で少数派である「女性」に対する不平等は論じられやすいが、「男性」に対しても固定観念やそれに基づく差別があるのではないか。「やらされている感」や「選択肢がない」を生む構造から「選択肢がありながら選んでいける」という組織であることが、ジェンダー平等を実現する組織の在り方ではないか、という意見も交わされた。宗会議員や寺内役員の男女比についても様々な発言があったが、人数を規則で縛ることよりも「少数派の意見をちゃんと拾って反映できること」の方が実際問題として大切であり、そのためにできることを考えていく必要があることが論じられた。